これについて〔対論者が〕言う。

これについて、〔釈尊は、〕色などの五蘊を説かれた。それらは苦であると説かれた。すなわち、苦聖諦を説かれた。〔四〕聖諦がないとはどういうことか。それゆえ、諸々の蘊は存在する。

〔それに対して〕説明する。

①ab 色の因以外には、色は所縁されない（＝見られない）。

そのように、四大種（四つの構成要素）は色の因だと説き示された。色がそれらの果であると説き示されているなら、四大種以外の、四大種それらとは別のものである色というものとしての果も存在しない。それゆえ、果は認められない。

〔対論者が〕言う。

現に四大種は存在する。それには因もあるから、果もあるのであり、色もまた完全に成立する。

〔それに対して〕説明する。

①cd〔果である〕色というもの以外には、色の因も見られない。

色以外には、また、これは色の因だというものは見られない。色は認められない、とすでに説明した。このように、色は認められないから、色の因も認められない。

〔対論者が〕言う。

これについてあなたは因によって果を排斥し、果によって因を排斥しているのであり、それについて何かによって他のものを排斥することは現にある。それがあるなら、他のものもまた完全に成立することになる。

〔それに対して〕説明する。

他のものがあるとは、言えない。なぜなら、このように、

②色の因以外に色があるならば、〔その〕色は因を持たないものとなってしまう。
〔しかし、〕どんなものも無因なものはどこにも存在しない。

もし、因を排斥しても果があるならば、そのとき因を持たないものとなる。因のない、いかなるものも見られず、どこにも説き示されていない。常にすべてからすべてが生じることになってしまうからであり、すべての努力が無意味であるという過失となってしまうからである。同様に、

③もし、色以外に色の因〔というもの〕が存在するならば、果のない因になるであろう。果のない因〔というもの〕は、存在しない。

もし、果を排斥しても因があるならば、その因は果を持たないものとなってしまう。果を持たない因はない。なぜなら、「これはこれ〔の因〕である」という言説もまた認められなくなるからであり、すべての因がすべてのものになってしまうからである。それゆえ、色の因も認められないし、色もまた果として認められない。また、

④色が〔すでに〕存在するならば、また、色の因〔というもの〕も認められない。
色が〔すでに〕存在しないならば、また、色の因も、認められないことになる。

これについて、色の因という何らか〔のもの〕を考察（＝想定）するなら、色は存在すると考察（＝想定）するのか。あるいは、色が存在しないと考察（＝想定）するなら、色は存在するとしても、色の因は認められない。存在しないとしても、認められない。それについて現に存在するとは認められない。このように、〔すでに〕存在するとしたら、因がどのような作用をするのか（＝因にどのような意味があるのか)。もし、〔すでに〕存在するものにおいても因の作用があるとしたら、どんなときでも作用をなさないことがなくなる（＝常に作用することになってしまう)。それもまた認められない。それゆえ、色が存在するとしたら、色の因は認められない。色が存在しないとしても、色の因は認められない。このように、色が存在しないなら、それは何の因となるのか。それゆえ、色が存在しないとしても、色の因は認められない。それは縁はあり得ないこととして、「存在しないもの、あるいは、存在するものにおいても、縁はあり得ない。(第 1 章 6ab)」と完全に説き示されたが、ここでも関連があるので説き示されている。

⑤ab 因のない色は認められず、認められないものである。

因なしの突然の色（＝因がなく、突然に生じた色）は認められず、認められないものである。なぜかと言えば、常にすべてになってしまうからであり、すべての努力が無意味になってしまうからである。それゆえ、因がないという主張は最も低いもの（＝不適切）であるから、「認められず、認められないものである。」と繰り返して、確信を持って説明されているのである。

⑤cd それゆえ、色の分別〔について〕は、いかなるものも分別すべきではない。

なぜなら、色の因以外には色は見られず（＝色は所縁されず)、色が存在してもしなくても、色の因は認められない。因のない色は認められず、妥当ではない。だから、あなたのような賢者の性質を有し、真実義を理解することを望む人であるなら、色〔について〕のいかなる分別も考察（＝想定）しないのが道理である。このように、住していないもの（＝存在していないもの）を考えることが、どうして理に合うであろうか。また、

⑥果は因と似ていると言うことは認められない。

果は因と似ていないと言うことも認められない。

果と因として考察（＝想定）するならば、果は因と似ているか似ていないかを考察（＝想定）するならば、それについて、果は因と似ているというその主張において、色は諸々の〔四大〕種（構成要素）の果として認められない。果は因と似ていないというその主張においても、色は諸々の〔四大〕種（構成要素）の果として認められない。なぜなら、これについて諸々の〔四大〕種（＝構成要素）は、〔地は〕堅さ、〔水は〕湿り気、〔火は〕熱さ、〔風は〕動きを本質とすると説かれるなら、〔四大〕種（＝構成要素）それらの特長は色には見られない（＝色に所縁することはできない)。それゆえ、このように、地は堅固性、水は湿気性、火は温暖性、風は可動性として所縁されるので（＝認識されるので)、このように果は因と似ていることはなく、因と似ていないこともないから、色が果であるとは認められないのである。

⑦受と想と行と識と一切の事物も、一切の行相において

色自身の〔自性の否定の〕次第と同じである。

受と想と行と識それらも、色が認められない〔のと同様に、〕順に認められないことは同じである。四大種（＝構成要素）以外には色は存在しないのと同様に、触以外に受はない。そして、色が存在しなければ色の因が存在しないのと同様に、受がなければまた触はないことは同じである。そのように、世尊もまた、

楽を体験する触に依って、楽の受を生じる。

と、説かれている。残りのものについても同様に、これに結び付けるべきであり、それゆえ、諸々の蘊が存在するということは認められない。世尊はまた、

この幻は凡夫を欺く。

と、説かれている。また、

色〔蘊〕は、泡のようなものであり、

受〔蘊〕は、水しぶきなどと似ており、

想〔蘊〕は、蜃気楼のようなものであり、

行〔蘊〕は、芭蕉樹のごとくであり、

識〔蘊〕は、幻のようなものである。と、

日種族（＝太陽の子孫。釈迦族の別名）の方（＝釈尊）が説かれた。

とも、説かれている。諸々の蘊は、色が認められない〔のと同様に、〕順に認められないことと同じであるが、それだけでなく、すべての法（＝存在）もまた、色が認められず、順に認められないことは同じである。このように、すべての法は、色が認められず、順に認められないことは同じであるから、

⑧空性に基づいて議論されている時に、誰か、論駁する者、そのすべては論駁とならない。論証対象（＝論証しようとしている主張内容）と等しいものとなってしまう。

空性によって（＝基づいて）議論し、詳細に努力し、完全に語る時に、空性ではないことによって（＝基づいて）答えたり、語ったりすること、それらすべては論駁にはならない。なぜなら、〔すでに〕論証された内容と等しいものとなってしまうからである。このように、例えば、一切の事物は本質によって空であるという主張において、実例を示し「布は本質によって空である」と論証する時に、誰かが「現に因である糸はある」と言うなら、それは論証対象（＝論証しようとしている主張内容）と等しいのである。ある論証によって「布は本質として自性によって空である」と〔第１章で〕説明されたが、それこそが因である糸が空性であることを完全に論証したものでもあるので、それゆえ、因である糸が空性ではないと言うことは、論証対象（＝論証しようとしている主張内容）である布について〔も〕等しくなる。同様に、人々が法（＝存在）のあり方を知る場合も、諸々の善法によって本質は善であると考えたり、残りのものも同様に認識できると考えたりして、そのようなことなどを言うならば、諸々の善法も縁起（依存関係）であるから、本質〔として〕存在しないので、それもまた論証対象（＝論証しようとしている主張内容）と等しくなる。論証対象（＝論証しようとしている主張内容）と等しいのだから、論駁にはならない。阿闍梨アーリヤデーヴァもまた〔『四百論』において〕

ひとつの事物の見え方、それが、すべてのものの見え方である〔はずである〕、と認められる。

ひとつのものの空性、それこそが、すべてのものの空性である。

と説かれている。

⑨空性によって（＝に基づいて）解説される時に、非難を語る者、その〔非難〕すべては非難ではない。論証対象（＝論証しようとしている主張内容）と等しいものとなってしまう。

空性によって（＝に基づいて）事物を本質〔として〕存在しないと考察する時、空性ではない何かによって（＝に基づいて）非難を述べること、それらすべてもまた、以前〔説明した〕通り、論証対象（＝論証しようとしている主張内容）と等しいので、非難とならない。それは同じこと〔を言っている〕だけである。他の個所でも区別して説明された。この二つの偈によって完全に区別することがすべて含まれているので、見るべきである。すべてが論証されているからである。

以上が「〔五〕蘊の考察」と題する第４章である。

【日本語試訳：クンチョック・シタル、西村香／2017 年 8 月】